

【今週の注目疾患】

《百日咳》

2025年第36週に県内医療機関から100例の届出があり、累計は3,048例となった（図1）。本年の累計届出数は全数把握対象疾患に変更となった2018年以降で最多であること、高水準で届出数が推移していることから、引き続き動向に注意が必要である。

2025年に届出のあった3,048例の概要は以下のとおり。

性別では男性が1,474例（48.4%）、女性が1,574例（51.6%）であった。年齢群別では10歳以上15歳未満が1,358例（44.6%）と最も多く、次いで5歳以上10歳未満が647例（21.2%）であった。重症化リスクが高い生後6か月未満児¹⁾は44例（1.4%）であり、診断時の症状・所見（重複あり）として、チアノーゼが11例（25.0%）、無呼吸発作が6例（13.6%）、肺炎が2例（4.5%）でみられた（図2）。

図1：2025年の県内の百日咳 診断週別・年齢群別届出数
（2025年第36週時点）

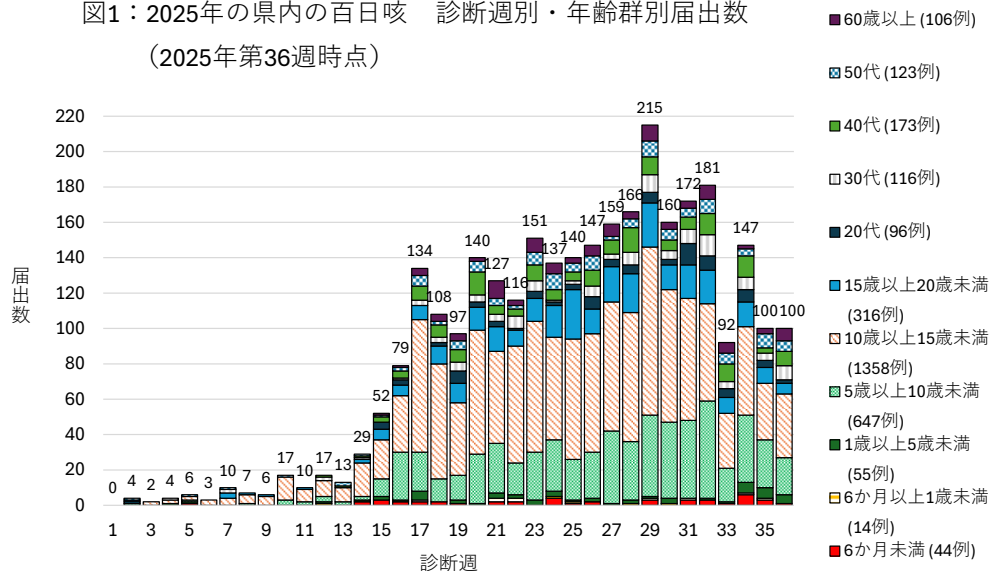
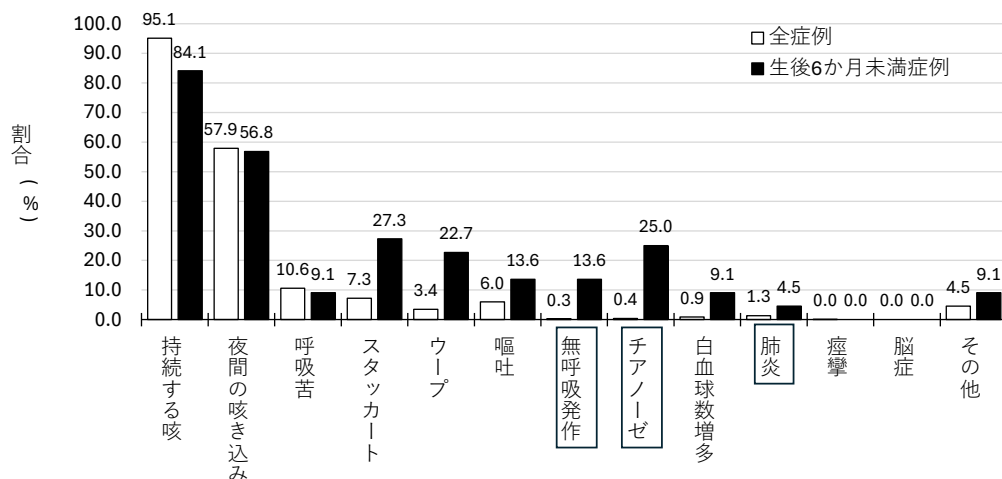


図2：2025年の県内の百日咳 全症例と生後6か月未満症例の症状・所見（重複あり）
（2025年第36週時点）



百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）によって起こる気道感染症である²⁾。感染経路は鼻咽頭や気道からの分泌物による飛沫感染、及び接触感染である。約7～10日の潜伏期間を経て、かぜ症状で始まり、次第に咳の回数が増えて程度も激しくなる。その後、持続的な咳嗽に加え、連続性の咳嗽発作（スタックカート）や咳嗽後の嘔吐、吸気性の笛声（ウープ）といった特徴的な症状を呈する^{1,3,4)}。

乳児期早期ではこれらの特徴的な咳嗽がみられないことがあり、無呼吸発作やチアノーゼ、けいれんを呈し、呼吸停止に至る場合がある^{1,3,4)}。特にワクチン未接種の乳幼児が罹患すると重篤化し易く、0歳で発症すると半数以上が呼吸管理のため入院加療となっているとの報告がある⁴⁾。

一方、青年・成人では主に2週間以上の長引く咳と発作性の咳だけのことが多い。軽症で診断が見逃されやすいが、菌の排出があるため、ワクチン未接種の新生児・乳幼児に対する感染源として注意が必要である^{3,4)}。

ワクチン接種による予防が可能であり、定期予防接種が行われている⁵⁾。2023年度以降は、百日咳による乳児の重症化予防の観点から、定期予防接種の接種可能な最低年齢が生後3か月から生後2か月に前倒しされた⁶⁾。

定期接種の対象の方は、接種時期を確認の上、接種をお願いします。

疑わしい症状がある場合には、速やかに医療機関を受診してください。

■引用・参考

- 1)国立健康危機管理研究機構：全数報告サーベイランスによる国内の百日咳報告患者の疫学（2023年）
<https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idwr/article/pertussis/040/index.html>
- 2)厚生労働省：百日咳
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou11/01-05-23.html>
- 3)国立健康危機管理研究機構：百日咳
<https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ha/pertussis/010/index.html>
- 4)厚生労働省：百日せきワクチンファクトシート
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10601000-Daijinkanboukouseikagakuka-Kouseikagakuka/0000184910.pdf>
- 5)厚生労働省：5種混合ワクチン
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/yobou-sesshu/vaccine/dpt-ipv-hib/index.html
- 6)厚生労働省：「予防接種法第5条第1項の規定による予防接種の実施について」の一部改正について（令和5年3月31日）
<https://www.mhlw.go.jp/content/001089225.pdf>